

長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵 『対馬州八幡宮御鎮座伝』について

徳 竹 由 明

長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫には、『対馬州八幡宮御鎮座伝』と題する書が蔵されている。神功皇后の「三韓

出兵」の顛末と対馬国上縣郡木坂の神社「海神社」（旧称

「木坂八幡宮」・「八幡本宮」・「上津八幡宮」の縁起を記した

「神功皇后新羅征伐對古傳」、下縣郡府中（現在の「厳原」

の神社「厳原八幡宮神社」（旧称「八幡新宮」・「下津八幡宮」

の縁起を記した「清水山八幡新宮御鎮座傳」、和多都美神と

八幡神との同体を説いた「和多都美神^ヲ奉^レ稱^ニ八幡^ニ之義^一」

の三部から成る書で、管見の限り宗家文庫蔵本が唯一の伝本

である。また神功皇后「三韓出兵」譚及び「海神社」・「厳

原八幡宮神社」の縁起説を直接関連付けた書としても、管見

の限り最初期のものであり、非常に興味深い資料である。そ

の全体像はほぼ未紹介の資料であるため、ここに解説を付し
て全文を翻刻紹介する。¹⁾

まずは同書の書誌を簡単に記す。

函架番号・宗家文庫 / 「記録類」・和書・漢籍 / 和書

/ B 神祇 / 二二 一。

形態・写本。袋綴 一冊。

写年・筆写者・「近世末期（近代初期カ）。筆写者未詳。

寸法・二七・一糎 × 一九・一糎。

表紙・黄土色表紙「後補カ」。

目録題・対馬州八幡宮御鎮座伝

外題・表表紙左上無枠金紙題簽（一六・二糎 × 三・六糎）

に「対馬州八幡宮御鎮座傳」と墨書

内題・一丁表中央に「對馬州八幡宮御鎮座傳」と墨書。

料紙・楮紙。

行数、字数・每半葉九行。一行一七字。

墨付丁数・二七丁。

遊紙・後ろに一丁。

印記・なし。

序・なし。

奥書・なし。

その他・面表紙右下に宗家文庫の蔵書票（四・〇糎×三・

五糎）貼付。

続いてこの資料の編者・成立期について考察してみたい。

まずは一九一七（大正六）年五月・長崎県教育会对馬部会編の『郷土史料 對馬人物志』『藤内蔵助齋延 子定房 齋長孫仲郷』項の藤定房に関する記述を見てみよう。²⁾

長子定房初名定清又定許通稱右近と云ふ幼より家學を修て名あり……（中略）……享保年間著す所令義解、本州

編稔略、物識草、清水山伊豆山八幡傳記、神功皇后三韓

征伐對馬古伝等あり享保十七年八月卒す年三十九。

この記述中の傍線部「神功皇后三韓征伐對馬古伝」なる書

は、本書の冒頭部「神功皇后新羅征伐對古傳」と名称が似てはいる。しかし既に拙論にて詳述していることであるが、本書の「海神社」・「厳原八幡宮神社」の縁起説を神功皇后「三韓出兵」に直接に結び付ける内容は、對馬藩の総司職を世襲した藤氏一門の「海神社」・「厳原八幡宮神社」に関する学説、即ち延喜式神名帳に載る對馬国上縣・下縣両郡の「和多都美神社」をそれぞれ「海神社」・「厳原八幡宮神社」の旧号と捉え、「海神社」・「厳原八幡宮」の開創と神功皇后「三韓出兵」とを直接には関わらせない説とは齟齬を来たしており、本書が藤定房の著作である可能性は低い。仮に藤定房が著した「神功皇后三韓征伐對馬古伝」なるものが存したとするならば、例えば對馬藩表所札方編・一七一一（享保二）年の巡検使来島の際の巡検使との遣り取りの記録である「享保 巡検使記録」³⁾に「八幡宮之事跡」・「八幡本宮御鎮座記拔書」等と称して記述されるものや、定房自身の著で「一七二三（享保八）年成立の史書『対州編年略』」⁵⁾に記述される、藤氏の学説に沿った神功皇后「三韓出兵」譚の基となるような簡略なものであつたのではないか。

続いて、對馬藩士中川延良（号・楽郊）の聞書き・安政六

(一八五九) 年成立の『楽郊紀聞』を見てみよう。⁽⁶⁾

八幡宮御鎮座伝記は、文化信聘の節、公義御役人より見度との事有。藤六右衛門より、樋口直右衛門 惣左衛門 養子。大田平駄右衛門三男、平山次郎左衛門弟なりに頼み、直右衛門古伝の趣を以て仕立て、御役人衆へ差出す。私は中清書の時、夫を一見し、其後は見ず。是は八幡宮に、前々より鎮坐の伝記とて別になかりし故也。

弘化四丁未八月十五日、仁位村和多都美ノ神主長岡可然、安曇郷春話。此人若年藤家に学。

頭書「今按、鎮座伝記、本宮新宮共に一冊の中」(巻

六「神祠 府中 社家附」)

この記述によれば、「八幡宮御鎮座伝記」なる書が、文化年中の朝鮮通信使易地聘礼に関連して対馬に来島した幕閣の要請により作成されたという。そしてその作成者は藤氏の門人でもあった樋口直右衛門であり、この直右衛門は「津島紀事」の編者として著名な平山東山(次郎左衛門)の弟でもあった。なお本書の書名『対馬州八幡宮御鎮座伝』は、樋口直右衛門が作成したとする「八幡宮御鎮座伝記」に名称が近く、また「神功皇后新羅征伐對古傳」と「清水山八幡新宮御鎮座

傳」とを内包した本書の形態も、頭書の「鎮座伝記、本宮新宮共に一冊の中」に合致している。また『楽郊紀聞』の著者・中川延良は、一七九五(寛政七)年生・一八六二(文久二)年没であり、右の記述が一八四七(弘化四)年段階での長岡可然・安曇郷春からの「聞書き」であるとはいえ、経歴不詳の長岡可然・安曇郷春共々樋口直右衛門や平山東山と同時代を生きた人物のはずである。「八幡宮御鎮座伝記」作成を巡る言説が、既に伝説化していたとは考えにくい。さらに樋口直右衛門の兄である平山東山の『津島紀事』は、

い・鎮座伝記ニ云、神功皇后拝_ニ和多都美ノ神_ヲ、祭_ニ瀛津島

姫湍津島姫市杵島姫ノ三神_ヲ、号_フト口開之神_ト、俗称_ニ弁

才天_ト、誤_レ也、(巻之八「与良郷内院村」)

ろ・本宮神社 神功皇后行殿之故址也、其山_ヲ謂_ニ本宮山_ト

……(中略)……鎮座伝記ニ云、到_ニ鰐浦_ト、居_ニ鳳輦_ヲ于

邑中ノ大石之上_ニ、定_ニ松隊八段_ト、而後入_ニ御行宮_ニ行

宮ノ故址、今称_ニ本宮_ト、同年十月三日昧旦、賽_ニ幣_ヲ天

神地祇_ニ祭祀_リ、又祀_ニ河海ノ貴良_ヲ、入_ニ真木ノ灰_ヲ於瓠_ニ、

箸及_ニ比羅_ヲ伝_ニ多造_ヲ、散_ニ浮海洋_ニ、神皇忽化_ニ男容_ト、環

アテ腹巻_ヲ、表_ニ加_ニ緋挂_ヲ、佩_ニ緋裳_ヲ、時_ニ孕_ニ而腹巻_ヲ不_レ

祗^ア、武内ノ大臣解^テ下^ニ、^一当^ニ甲ノ間^ニ、而帶^ニ玉纒^ノ太刀^一、
 当^ニ綿ノ脛巾^一、除^ニ天井玉宸^一、退^ニ翳羽之女官^一、指^ニ上^一、
 蓋^ニ、撞^ニ鰐矛^一、立^ニ御座^一、于^レ時旭日耀^キ、衆軍遙^ニ三拜^一、
 神后^マ、振^ニ鰐矛^一、鳴^ニ鉦鼓^一、則神風吹起^テ、大小龍龜鰐
 魚振^ニ立^一、鰐波^一、守^ニ護^一シ皇舩^一導^ニ衆軍^一、如^レ飛^フ到^リ
 于新羅^ニ云云、(卷之三「豊崎郷鰐浦村」)

は・營^テ異國鎮護之宮^一、而祭^シ鰐神^マ、鎮座傳記^三云、鰐
 神ハ彦火火出見ノ尊彦湊武ノ尊豊玉姫ノ命也、朕^カ魂モ又為^ニ
 鰐神^一、降^ニ伏^シ異國^一守^ニ護^一シ朕邦^一、大臣奉^ニ勅命^一、立^ニ
 壇墠^一以祭^レ之、因名^{トス}焉、(卷第六「三根郷・木坂村」)
 に・鎮座傳記云、白鳳六年丁丑、造宮宮殿于清水山麓、則
 奉彫應神天皇之神像、又奉迎坐于木坂山神功皇后之神像、
 以仲哀天皇神功皇后應神天皇稱新宮八幡三所也云々(卷
 之二「神社・八幡神宮」)

と、しばしば「鎮座傳記」なる書からの引用を載せる。当然
 のことながら、平山東山にとつて実の弟である樋口直右衛門
 の著作である「八幡宮御鎮座伝記」は入手も利用も可能な文
 献であつたはずである。そしてこれらの引用の記述は、「い」
 が本書の五丁才四行から五行、「ろ」が本書の七丁ウ九行か

ら八丁ウ三行、「は」が本書の一〇丁ウ六行から八行、「に」
 が本書の一八丁才八行から一八丁ウ三行に、相違を有しつつ
 も内容は大凡一致しており、平山東山が引用した「鎮座傳記」
 は本書「対馬州八幡宮御鎮座伝」である可能性が高い。以上
 の事から鑑みて「楽郊紀聞」のいう樋口直右衛門の「八幡宮
 御鎮座伝記」とは本書「対馬州八幡宮御鎮座伝」であり、又
 本書の成立は文化年間で且つ「津島紀事」成立の一八〇九
 (文化六)年以前ということになるのではないか。

なお本書の宗家文庫蔵本は、誤写や返り点の誤り等が散見
 し、また紙もやや新しいもののように思える。恐らくは樋口
 直右衛門作成の原本ではなく、近世末期から近代初期にかけ
 て写されたものであろう。

以下に、長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵「対馬州
 八幡宮御鎮座伝」を全文翻刻紹介する。翻刻に際しては、原
 本の面影をなるべく忠実に伝えるよう努めた。但し見やすさ
 を考慮して、割注は通常の文字と同じ大きさで表記して山括
 弧で括った。また改行箇所は「ノ」で示し、誤写と思われる
 個所には右に「(ママ)」を付した。また原本には丁付は記さ
 れてはいないが、墨付丁数を(二丁才)(二丁ウ)の如く記

した。

註

- (1) 小峯和明氏「侵略文学の文学史・試論」(『福岡大学研究部論集A・人文科学編』十二六 二〇一三年三月)が本書の略解題と梗概を載せる。
- (2) 引用は、鈴木棠三氏編・対馬叢書第四集(一九七七年九月 村田書店)所収のものによる。
- (3) 「対馬厳原八幡宮縁起説の変容と神功皇后「三韓征伐」譚」(中京大学『文学部紀要』四七 二二〇一三年三月)、及び「対馬・海神社縁起説の形成」(『説話・伝承学』二二二 二〇一五年三月)による。
- (4) 対馬古文書研究会編・宗家文書を読むその式(二〇一五年一〇月 交隣舎出版企画)所収のものにより確認した。
- (5) 鈴木棠三氏編・対馬叢書一(一九七二年六月 東京堂出版)所収のものにより確認した。
- (6) 引用は、東洋文庫・三〇七所収のものによる。
- (7) 引用は、鈴木棠三氏編・対馬叢書二(一九七二年一〇月)一九七三年九月 東京堂出版)所収のものによる。なお長文となるので引用しなかったが、巻之二「神社・八幡神宮」項には、本書「知多都美神」奉_レ稱_二八幡_一之義」の全文に対応する引用を載せる。

附記・本稿は、二〇二二年度中京大学特定研究助成(個人研究)「対馬・釜山の寺社に於ける縁起言説変容の様相とその背景」の成果である。貴重な資料の閲覧・紹介をご許可下さった長崎県立対馬歴史民俗資料館に心より御礼申し上げます。

(文学部教授)

《翻刻》

對馬州八幡宮御鎮座傳

(二丁才)

神功皇后新羅征伐對古傳

(二丁ウ)

仲哀天皇八年春正月熊襲叛^マ「皇帝」、天皇欲^レ討^レ之時^ニ有^レ神詔^ニ「皇后」、而誨^ハ曰^ク「^ノ玉ハク、熊襲ハ小國也、何^レ親征^セ乎、愈^レ之有^ニ實國^一、伐^レ之則熊襲ハ當^ニ自服從^一ノ矣、寶國者以下^ニ出^ニ神寶^一ノ玉^ニ之國^上、故乎上古素戔嗚尊之國也、而受^ニ罪^一于本朝^ニ述詳^ニ正史^一、且^ノ數犯^ニ本朝之海邊^一、當時有^下對馬嶋^ヲ爲^ニ已^カ屬國^一之志焉、熊襲亦有^レ故^ニ于彼^一乎、神誨可^レ尊哉^マノ天皇聞之、躬親登^ニ于高山^一觀^ニ覽西方^一、大海廣^ニ遠^一、於^レ近^ニ不^レ可^レ有^ニ國^一、於是思惟^ラ、雖^ニ神聖之誨^一暫^ニ置^一是、當^ニ討^ニ簫牆之賊敵^一、將^レ征^ニ熊襲^一皇后曰、無^ニ(二丁才)^一已則可^レ伐、吾雖^ニ婦女^一也^ト請守^ニ後軍^一、共爲^ニ前箭後^一箭而征伐^セ、乃出^ニ軍^一、愛^ニ異賊^一有^ニ塵輪者^一、或云羽白熊鷲^一ノ長^ニ習飛業^一、略^ニ盜人民^一、國人大^ニ懼^一、天皇聞^レ之怒^ニ曰^一、怪異^ニ害^一民、近^ニツカハ^一則射殺^セ也、忽^ニ黑雲飛來^一、天皇意^ニノ塵

輪^{ナラ}、乃注^レ矢射^レ之、應^コテ手如^ニ落^一、于^レ時毒矢一本^ノ落^ニ天皇^一之側^ニ、玉體遽^ニ痠^一、靈運將^レ遷^ニ、天皇執^ニ皇^一后之手^ニ遺勅^一曰、朕不^レ信^ニ神教^一、強^テ伐^ニ熊襲^一、今罹^ニ此^一凶害^ニ矣、此神之咎^ト也、在^ニ汝身^一皇子不^レ目^一降誕^ニ、以爲^ニ皇太子^一、汝乃攝^レ政^ニ奉^ニ神教^一、當^ニ征^一(二丁ウ)寶國^一、而平^ニ安^一天下^ニ、朕魂^モ亦不^レ離^レ近^ニ、可^レ守^ニ、皇后^ノ奉^レ詔落^ニ紅淚^一于天皇^ノ手^ニ曰、吾雖^ニ婦女^一爲^ニ正^一爲^ニ奇^一、左^ニ右^一天皇、除^ニ平^一風塵^ニ與^ニ世長^一奉^ニ配^一、與共爲^ニ行^一平安無事之化^一、故^ニ陪^一從^ニ于茲^一、悲歎之間^ノ曰、伴今在^ニ胎中^一皇子必也伐^ニ實國^一、憂^ニ後勿^一勞^ニ震^一、

同年二月六日天皇崩、皇后詔^ニ武内大臣^一曰、隱^ニ密崩御^一勿^レ泄、朕則爲^ニ足仲彦^一天皇^ニ仲哀之御諱^一ノ直^ニ隨^一神教^ニ征^一伐新羅^ニ、命^メ使^ニ整^一戰艦^ニ、今也二月(三丁才)初午日所^レ執^ニ行于兩宮^一舍人^ハ祭^ハ、神皇始征伐^ニ新羅^一月之言之緣也^ト同年三月一日皇后入^ニ御齋宮^一、自^レ爲^ニ神主^一、手^ニ持^一著^ニ鈴神魂^一ノ木^ニ、立^ニ焉^一令^ニ武内大臣^一撫^ニ琴^一、令^ニ雷^一大臣^ノ命^ニ聞^一神詔^ニ、而撫^ニ琴^一七日七夜祈^ニ曰^一、往^ニ日^一所^レ誨^ニ神^一何^レ神乎、欲^レ知^ニ其^一名^ニ、時^ニ鈴中之玉^一爲^ニ神^一ノ告^ニ曰^一、居^ニ折鈴^一五^ニ十鈴^一宮^ニ、問^ニ神^一名^ニ曰^一、撞^ニ神魂^一ノ木^ニ、嚴^ニ御魂^一天^ニ疎^一向津媛、

又問有^レ神乎、對曰、波瀲^{ナキサ}／武^{タケ}尊住吉神者此我也、吾子力強心猛、父子^三丁^ウ共可^レ進^三先鋒^一、次建布都神^{ユシロ}事伐神^ヲ祇神^ヲ現^ヲ出曰、導^{ミツ}王^{ミフネ}船^ヲ護^ヲ戰^{タケ}鬪^カ、此三神^三謂^フ荒魂^{アラマ}神^一、又曰^二和魂^{ニギマ}、服^ツ玉體^ニ守^ニ壽命^一、

於是遣^二鴈丸者^一西海^ニ令^レ見^レ國^一、復命^{カヘリモツ}曰、近^ク不^レ如^ノ可^レ有^レ國、亦遣^二名草者^一、報云津嶋^ト與^ニ新羅^ニ海路^ヲ不^レ遠、皇后大悅、先遣^二雷大臣^一命于津嶋、使^下檢^ニ考渡津^ニ造^ニ營^シ行宮^一定^上糧倉^{カテ}所^ヲ于伊奈邑^一、在上縣、／皇后至^ニ於肥前國^一、於^ニ玉嶋邑^一小川傍^ニ垂^レ釣誓^ノ曰、朕伐^ニ寶國^一、事就^{ナラ}魚來喰^{ハメ}此釣^一、乃獲^レ魚、又浸^ニ四丁才^一御髮于流^一祈曰、事就^{ラハ}此髮^一二分^ニ、龍女水女現^ニ出水中^ニ三分^ニ御髮^一、軍衆聽^レ之勇進、

皇后欲^ニ速到^一津嶋^一、召^{イッ}儀良^ヲ、皇船之舵工、儀良匍匐^{ハラハ}隱^レ面受^ニ勅命^一答曰、僕久^{ヤツカレ}居^ニ下津國^一、藻蠅殼^{モカキ}生^ニ茂^{レリ}于面^一、甚醜^{ミナク}、請須曳居^ニ中津國^一而去^ニ蠅殼^一、而^レ後可^ニ昇來^一去^ル、武内大臣察^ニ皇后震襟^一、急^ニ欲^レ出^ニ儀良^一、於^ニ船場^一濱殿奏^ニ舞樂^一自^ラ舞^フ、太田命舞^ニ千^ノ歲樂^一、儀良欣然感^レ之、出來祝^{ホキ}曰、大幸^{ユクサイ}々々恥^ニ己^カ容^ヲ醜^ニ懸^ニ袂^ヲ于面^一舞^ニ三^ノ歲樂^一、今也、放生會濱^ニ四丁才^一殿朝神樂之言之緣

也、

同年六月一日渡^レ海着^ニ御對馬州豆酸邑^一、在下^ノ懸、入^ニ御行宮^一、行宮跡後^ニ三^ノ神住居神社^一、拜^ニ多久頭神社^一、在豆酸邑立良山之麓、祭神高皇產靈御子神、而拜^ニ奈伊良神社^一、祭神彥火／火出見尊豐玉姬玉依姬今云大隅正八幡是也、次拜^ニ和多都美神^一、祭神瀛津嶋姫湍津嶋姫市杵嶋姫、以上二社在^ニ下縣内院邑納嶋^一、俗誤^テ稱^ニ弁才天^一、／今也所^ニ行於本宮^一六月朔日入座之祭^ハ、神后^ノ初^テ入^ニ座對州之日也、渡海之時有^ニ神后^一詠歌／都仁氏山乃端耳見志月影毛波與利出天波爾^一五丁才入

奴留

同年七月十八日着^ニ御與良邑^一、在下縣、今之府中也、今^ノ也所^レ行^ニ于豆酸邑^一七月十八日船浮神事、此／緣也、而据^ニ鳳輦^一于與良石之上、與良石方壹丈許、平盤石／也、色白、在^ニ國府櫻川之南中洲之西、國府獄之東^一、待^ニ衆船之着到^一、入^ニ御行宮^一有^レ日、行宮跡在^ニ與良石之東^一、号^ニ濱殿^一、祭^ニ豐玉彥神^一、古昔八月十五日／八幡新宮有行幸、執行放生會之地也

同夜有神、豐玉姬神也、号^ニ與良御祖神社^一、在^ニ于國府宝滿

嶽、誨皇后ノ曰、新羅之民外強内弱、急攻テ有レ利、皇后欣敬（五丁ウ）于時皇后産氣既起矣、於是冷_レ腹于白石、白石ノ在于與良石之北四十歩許之处、色白高一丈余、如立柱而少斜、神后紀云當皇后之開ノ胎則取石挿_レ裳祈曰、事竟還日、産_ニ於茲土云云、祈日在胎中_ニ之皇子ノ爲_ニ（タラハ）吾國ノ主「此時不_レ可有_ニ産生、而可_レ生_ニ征韓之ノ後、産氣既止焉

一云、此後過國府嶽之東、飄風忽起墜_ニ笠于淵、後名_ニ其地ノ云_ニ笠淵、而過_ニ上原憩_ニ于淵邊渡_ニ（ル）川時、水深探_テ裳過_ク、後名号_ニ裁裳淵、而至_ニ上流令_ニ士卒_ニ（ラ）礪_ニ兵ノ刃、後名_ニ其地_ニ号_ニ砥石淵云云、

頃陰雨_ス、然_{トモ}欲_下乘_レ敵未_レ整征伐上、解纜邊出、至_ニ綱ノ懸

在于大船越、丘之東北岩崎也、之洋_ニ、比迅電風雨、王

船漂（六丁才）惑、皇后並群臣切_レ爪斷_レ髮投_ニ海被除_{（ハラ）イ}、遣_ニ胡禄ノ于海中、令_レ祭_ニ海神、胡禄海上導_ニ神也、又云磯

良、於鴨居瀨浦之海邊有ノ神石、傳故事号胡禄石、既風靜

波平雷止雨晴、此時雷落_{（ツル）}、一ハノ者落_ニ于鴨居瀨浦、

今号其處謂伊加都知浦、一者墜伊奈郷琴浦云

船上得_ニ安全、着_ニ御於鴨居瀨浦、在下縣、以_ニ紫瀨ノ戸

在鴨居瀨浦 和多女御子_{（ワタメノミコ）}ノ神社_ヲ為_ニ行宮、鴨居瀨者對州

ノ古傳曰、彦火々出見尊、以_ニ豐玉姬_ニ為_レ妃、産_ニ生彦波瀲武尊、豐玉姬自抱_ニ皇子_ニ到_ニ于對州、於_ニ此地_ニ奉_レ養_ニ育皇子、故彦火火出見尊送_ニ御歌_ニ曰、澳津嶋鴨着_{（ツツ）}嶋、仁我寝_{（イネ）}志妹波不_レ忘世、乃ノ事々乎、因茲有_ニ此邑名、又謂紫瀨戸者、神功皇后祭_ニ海神_ニ之時、投_ニ入裳于海中、尔来其处（六丁ウ）生_ニ紫草、故為_レ名、云和多女御子神者波瀲武尊也、今稱_ニ住吉歌、西乃海淡来加原乃波間ノ與利顯礼出志住吉乃神者此神也云云、祭_ニ海神、豐玉姬玉ノ依姬也、祭于鷄知邑白江山、今合祭于同邑住吉社中、又於其海岸、修_ニ造王船及從船、其材為石、其形存_ニ于今云、

而着御大千尋藻浦、在下縣、祭_ニ岩劔神社、建布都神、

今称_ニ妙劔_{（イレヒコ）}入彦神社、事代主神、今称_ニ權現、

從_ニ此着_ニ御佐賀浦、在上縣、入_ニ御行宮、行宮跡、今称_ニ宗形八ノ幡、一云発_ニ之至_ニ隣浦、狩_ニ饗_ニ軍士、獲_ニ牡鹿、

故名_ニ其处_ニ謂_ニ男鹿浦、今用_ニ小鹿之字、又発_ニ此浦至_ニ隣浦、皇后上_ニ陸休息焉、後尊其地為_ニ社号假殿宮、于時鷲

翔_ニ于空、皇后射之落、故名_ニ此處（七丁才）号鷲見浦、後

誤称鷲見浦云々、

誤称鷲見浦云々、

誤称鷲見浦云々、

而着「御琴浦」在上縣、入「御行宮」、此時王船之碇／沈于海底、於是安曇磯武良人于海、得「沈碇」／而還、得碇之處、今謂「海宮之通路」、安曇者海神之苗裔、／行宮跡号「胡祿神社胡祿御子神社」、今称「琴崎大明神」、一云神龜哺「碇綱」来于王船云、

発琴浦到西泊浦 在上縣、着「御行宮」 行宮跡号能理刀神／社、祭大中臣神、于時風逆焉、皇后祈之 祈風之跡祭和多女神、今／称「乙宮」、忽「變」為「順風」、故上船、

從此着「御鰐浦」 在上縣、神功紀所謂和珥津、謂豐崎鄉乎、此浦和珥津之（七丁ウ）本浦乎、安「鳳輦」于邑中大石之上、定「船隊」為「八／段」、軍令畢而後入「御行宮」 行宮跡、今称「本宮神社」

同年十月十三日昧旦、皇后奉「幣帛」天神地／祇「祭祀」 又祭「河海貴良」、入「真木灰」於瓠、箸及／比羅傳多「造」、散「浮海洋」、神皇忽化「男形」、着「腹／卷」、表「加「緋」挂」、佩「緋裳」、于時懷妊「腹卷」不「合」、武／内大臣取「草摺」當「腹卷」脇、而帶「玉纒」太刀／當「綿」腰巾、押「除天井玉宸」退「翳羽」之女官、指上／蓋「撞」繡矛、立「于御座」、

于時旭日灼耀、衆軍遙（八丁才）拜「神后」、神后振「繡矛」

鳴「鉦鼓」、則神風舒「起」、大／小龍龜鰐魚振「立繡波」、守「

護龍舸」導「衆船」、如／飛到于新羅、新羅驚駭、勒「兵將」

防「之」、神后以「振浪繡切浪繡」、則潮花速「于國中」、

又振「繡矛」／用「潮溢瓊」、如「滿潮之昇」、皇兵進伐新羅、

民庶／無「術」防禦、如「溺」海中、又以「汐涸瓊」、忽為「

陸」、敵／下「坳地」、又用「潮溢瓊」立「溺」之、新羅震怖

各捨「兵」走、于「時日將「西没」、武内大臣祈「招」夕日

／夕日乃止「恰」如「春日」、無樂之日招「自」此起、無「晝

夜」征々（八丁ウ）直「到」于王都、拔「之」皇軍一時「發」声焉、

新羅王／恐「慄」、自「建」國以來未「聞」海水之如「登」于國／

中、天運既盡國家將「沈」有「成術」、向「東方」聖帝／乎早卒

降服矣待「且」、新羅王波沙寢「其子」／富利知干素組面縛奉「

圖籍」、叩頭謝「罪」、自／今以後永「為」馬「卒」、不「乾」舟

腹「奉」調、願以助「命」、／諸將有「日」殺「之」者、神后聞「之」、

勅宣降服勿殺、／遂收「其圖籍」、取「質」釋「組」、而赦於是、

造「神魂木」、／以「住吉」魂「号」三國守「神」、住吉魂謂波瀲武

尊、立「新羅王」之（九丁才）門内「祭」鎮「之」焉、新羅王以「

微叱」已知波珍干／岐「為」質、載「綾羅縑絹」于八十艘「從」皇軍

一、聞^ニ新^ニ羅^ノ之降服腹也、百濟王同來^{（取カ）}矣、國定^ニ官家^一、高^ノ麗王亦馳^レ使奉^レ書請^レ降、於是皇后以^ニ弓^{（ユ）}彌^{（ハツ）}書^ニ大磐石^一曰、三韓^ノ王日本之犬也、弓^ハ謂^レ武、大磐石^ハ謂^レ不^レ絶、于^ノ後代犬^ハ謂^ニ降服之人^一、又曰八幡宮之駒犬^ハ用^ニ韓犬^一、所^レ虜^ニ三韓王^一之義也、

同年十一月午日 一云卯日、還^ニ幸^ニ于對馬^一着^ニ御鰐^ノ浦^一、立^ニ矛七柄^一藏^ニ劔八枚^一、祭^ニ嶋大國魂神^一 祭神素戔^ノ鳥尊、祝曰、新羅永^{（シラキヒタ）}順^{（シ）}吾國豐^{（ユカ）}矣、因以名^ニ其地^一謂^ニ（九丁ウ）豐^一 豐訓登與、又留^ニ軍將七隊^一鎮^ニ護對島^一 其跡謂矛大明神、ノ今也十一月初午日志津之祭^ハ、征^ニ伐新羅^一靜^{（シツメ）}ノ謐其寇^{（ラ）}還^ニ幸對馬^一之月也、此其緣也、志津者ノ志津女之義也、皇后船上^{（ナシ）}詔^ニ武内大臣^一曰、新羅王無^{（ナシ）}禮^{（イ）}于我、ノ故學^レ兵討^レ罪、而絶^ニ民命^一不^レ少焉、天心可^レ懼、故ノ祭^ニ鎮靈魂^一矣、大臣奉^レ詔隨^ニ汀拾^一収螺^{（ツキ）}小貝^{（ミ）}、ノ号^ニ新羅人之首^一 螺蛸之形似^ニ新羅人^一首、故取^ニ用之^一、立^ニ鱸矛^一鳴^ニ鉦鼓^一以^ニ螺蛸^一等^ニ諸軍之種數^一、而陳^{（ネ）}之讀^ニ詔文^一（一〇丁才）畢而放^ニ生之^一海濱、諸士發^レ声而止、皇后在^ニ于浮殿^一 謂皇舟 自^ニ扇^ノ間^一觀覽 神后之鳳輦懸^ニ扇形之鏡^一、此^ノ緣、今也ノ所^レ行^ニ于兩宮^一放生會之緣也 一云於佐賀浦有此事云、

ノ然後巡^ニ視對馬^一西面^ニ自^レ舩^一觀^ニ覽木坂山^一 在上縣木ノ坂邑、詔^ニ武内大臣^一曰、此山者神靈留座地也、宜^ノ於^ニ彼山頭^一造^ニ異國鎮護之社^一、祭^ニ祀鱸^{（ヒシ）}神^一 鱸^ノ神^ハ火々々^ノ出見尊波瀲武尊豐玉姬命也、朕^ノ魂^{（モ）}為^ニ鱸神^一、永^ニ降^ニ異國^一守^ニ吾^ノ國^一、其心意與^ニ天壤^一無^レ究矣、大臣奉^レ詔、定^ニ神籬^{（ヒモロキ）}ノ磐境^{（イワサカ）} 謂古之社、齋^{（イフ）}奉^ニ鱸神^一、皇后藏^ニ八流^一旛^{（ノ）}于此地^ニ（一〇丁ウ）曰此征^ニ伐新羅^一之驗也、

而着^ニ御仁位邑^一 在下縣 入^ニ御濱殿神社^一 祭神彦火々出見^ノ尊豐玉姬命、今称患比須、從^ニ此到^ニ黑瀨浦^一 在下縣、皇舟之着處後号^ニ御着之浦^{（ラツキ）}、令^ニ築^ニ城^{（ヲ）}于^ニ黑瀨山^一、祭^ニ鱸神^一号^ニ大吉戸^{（ラ、キト）}神社^一 吉戸^ハ城之古称、今称城八ノ幡是也、試^ニ石弩弓箭之規矩^一 傳^ニ石弩之矩處有二處、一謂^ニ管^{（スケイ）}權^{（クワン）}濱^一ノ一謂^ニ氣足^{（キタラシ）}浦^一、皆有下称^ニ神功皇后石^一者、試^ニ弓箭^一處、謂^ニ之御的場^一、又有^ニ皇后休息之處^一、謂^ニ之皇ノ后崎^一、又從軍之舟之泊處謂^ニ之隊^{（クイ）}浦、置^ニ防人^一守衛、從^ニ此着^ニ御難知邑^一、入^ニ御行宮^一 以^ニ和多都美神社^一爲^ニ行宮^一、（一二丁才）而着^ニ御與良邑^一、觀^ニ覽清水山^一、宣^ニ神靈之盛山^一ノ也 清水

山者今八幡新宮之地、有_レ觀覽之處、後号_二金倉神社_一、在_二于清水山_一前原、今称_二天_一道茂、置_レ御守鏡_ヲ于石上、祭_二拜_一和魂神及和多都_一美神日本武尊足仲彦天皇、定_二神籬磐境_一、祈_二永守_一天下、

同年十二月從_二對馬_一到_二筑紫_一、生_レ譽田天皇、_一然後歷_二星霜_一、仁德天皇四十一癸丑年十一月卯日、異賊_ノ戰艦如_レ亂_ニ竹葉_一見_二於對州西面_一之海上、州人大驚扶_レ老携_レ幼、竄_ニ於山林_一、(一二丁ウ)中、壯者雖_レ屯_二海邊_一、殆惑_二防禦之術_一、而移_レ時國_ノ家之存亡只在_二此一時_一、于_レ岨奇雲一片起_ニ於_一木坂山之嶺、而係_二于海上_一、忽風起_レ自_二東南_一、藿_ノ木折_レ枝波浪高舉、於_レ此賊船翻_レ風漂_レ波、無_レ由_ノ可_レ生焉、須臾_ノ風靜波平、而遙望_二海上_一、賊船無_レ有_二一_一在_二、恰_モ如_二風前之落葉_一、咸散去矣、於是屯_二于海邊之士卒_一、始得_二國家安全_一、喟然歎曰、是_ノ即神功皇后懷_二胎_一譽田天皇_一應神天皇、征_二伐新羅_一還幸之時、祭_二國守和多都美神_一于此山、又留_二(一二丁才)_一八流_ノ幡_一八流幡、豐幡真幡廣幡栲幡也、此四有陰湯紅素_二二色_一着、此幡之鈴存于_二今_一、吾神靈在_二于此幡_一留_二于此地_一、永降_二異國_一守_二吾國_一之神誓、誠在_二于茲_一乎、相共拜_二山頭_一、即奉_二所_一其負_二之筋_一祿于山

頭、今也十一月卯日造_二矢三十六筋_一奉祭、此之緣也、

於是立_二廟_一於木坂山嶺、以_二八流幡_一鎮_二坐其廟_一裏、祝曰、坐_二此宮_一降_二異國_一守_二吾國_一、可_二下_一與_二天地_一無_レ窕矣、名_二其廟_一號_二八幡宮_一、以_二彦火々出見尊_一鎮_二座同殿_一、此依_二神功皇后之神詔_一也、(一二丁ウ)此時太田宿祢命現出、定_二神廟之地形_一、始自_二南終_一于北、于_レ今曳_二注連_一效_二之云_一、同時真名鶴昨_二稻穗_一飛_二下自_一空、落_二其稻穗_一、忽_レ生_二苗_一、秋之垂穗八握_二莫_一々然也、以_レ是備_レ供、落_二其穗_一処名曰_二伊奈_一、又祭_二鶴靈_一号_二伊奈久比神_一、在_二伊奈邑_一、此鶴者大歲神也、云又移_二植_一此稻_二佐護_一三根_一、以_二伊奈佐護_一三根_一奉_二神田_一、是其緣也、

社家神人居_二住於木坂山_一下、守_二此神廟_一社家伊豆ノ姓也、神功皇后同祖也、續日本紀云、天平十四年四月甲申、賜_二外從五位_一日下部真益人(一二三丁才)伊豆國造伊豆直姓云々、姓氏錄云、鴨君日下部宿祢同祖、彦坐命之後也云云、系圖云、彦坐命者人皇九代開花天皇之皇子、崇神天皇之弟、神功皇后者彦坐命四代之孫也、然後木坂山之麓伊豆原有_二一小丘_一、老翁_一ノ人忽然立焉、耕_二于其側_一者、異_二問_一其名、曰吾名_二白鬚翁_一、一翁曰我是太田_一者也、又問_二住處_一、

指^ニ南方^一曰、吾住地者阿江也^{アエ}。翁之顯處之一小丘、在^ニ于大鳥居之^一前、以爲^ニ靈地^一、無^レ瀾入者、後知此翁太田神磯良神、曰^ニ阿江^一所^レ指之地、今号^ニ阿連邑^一、在^ニ下縣^一、^ノ又問何故來^ニ於此^一乎、翁答曰、吾欲^レ拜^ニ神功皇^一后之神靈、而以來也、因與^ニ社家^一登^ニ于山頭^一、拜^ニ(一三丁ウ)八幡宮^一止^ニ住於木坂邑^一、令^下社家傳^中自^レ雷命^一所^レ傳之龜卜及祭禱之儀^上、

一時此翁逍^ニ遙於海邊^一、于^レ時於^ニ木坂山神廟^一頭見^ニ有^一靈妙、於是奉^ニ幣帛^一願^ニ有^一神之詔、乃神功皇后神詔^ニ於此^一翁曰、吾親^ラ伐^ニ新羅國^一、是非^ニ我力^一、在^ニ胎中^一譽田天皇與波瀲武尊同體之神、在^下伐^ニ異國^一、而爲^乙吾國泰平^甲之德^上、因^レ之功終也、以^レ是譽^ニ田天皇率^ニ其傍人^一、在^ニ于此山頭^一、而曰^ニ夜朝暮^一防^ニ禦護異國之賊徒^一、守^ニ吾國泰平^一、而實^ニ祚無^一シト^一、(一四丁オ)窮焉、乃以^ニ神詔^一告^ニ縣主^一、因勅^ニ祭^一譽田天皇、于^レ時繼體天皇御宇也、翁曰、我至^ニ于皇城^一、奉^レ迎^ニ譽田天皇^一、艤而去焉、然後供^ニ奉神體^一到^ニ着綱^一在下縣口、於^ニ神津嶋止宇野^一典^ニ御饌^一祭^ニ此地^一、於^ニ朽木^一在上縣今号^ニ吉田邑^一白嶽^一、典^ニ御饌^一發^ニ此地^一、到^ニ本坂^一此時取^レ驚之翁乘^ニ舟出迎^一、供奉之人

請^レ水、翁乃汲來與^レ之、因名^ニ其地^一謂^ニ驚水^一在^ニ木坂邑^一、而於^ニ飛^一崎同上、典^ニ御饌^一然後鎮^ニ座於木坂山^一津浦嶋白嶽飛崎、各^ノ造^ニ營社^一傳^ニ此故事^一、而彼二人翁不知^ニ所^一其往焉、(一四丁ウ)

祭神

一ノ御前彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊 爲^ニ之應神天皇^一也
二ノ御前彦火々出見尊
三ノ御前豐玉姬命

謂^ニ之八幡本宮三所

脇左右御前道主貴宗形神

右五神者祭^ニ於本殿^一

一宮一宇 祭神神功皇后

若宮一宇 祭神神武天皇(一五丁オ)

新靈一宇 祭神神武天皇御兄弟之靈

瓊宮一宇 祭神豐玉姬命

謂^ニ之稚輩^一宮

行先殿一宇祭神 殿守

濱殿御子一宇祭神愛敬惠比須神

御先駈一宇祭神 太田宿禰

乳母神一宇 四坐 祭神 葺不合尊之御乳母神

飛崎 一宇祭神 太田命

白鬚 一宇祭神 磯良（二五丁ウ）

金倉 祭神 金倉魂神稻倉魂神天富神
カナクラマノウカノミタマノアマヒノ

駒犬二像 謂之隼人、非尋常駒犬、為至貴之靈像、
コマイヌ イヌシト

奉安置御神像之脇、謂之火ノ酢芥命夫婦也、外有韓
ホノ スセリ

犬一連、古物也

神籬磐境廻八町今云伊豆八町木坂八町是也

神位 謂被奉授三位田、所領皇帝之祭之官社也、從

四位下

宮殿 神殿 向レ西四間半二間半 廣前 四間半五尺余 檜

椽（マ） 一間

欄干階 前左右 廊下 一間 拜殿 三間二間 陣座 隨身

六座 鳥ノ井濱殿 饗座殿居所御物置御廐等有之 自拜ノ殿
ハマトノキナヅノトリイ

至三大鳥居 百六十步、大鳥居之邊有御手洗川、御前濱向
ナ、ホナミ

于朝鮮、七穗波之荒海也（二六丁才）

神事祭禮

正月元日

同七日

同十五日

二月 神功皇后御祭

同中午日祈年祭
トシゴイ

六月朔日入座神事
イリマセ

八月五日放生會大祭

十一月 神功皇后御祭（二六丁ウ）

同中午日神嘗祭
カンナメ

十二月晦日御松立同夜年籠
イモリ

神事祭祀之式畧于此

神輿之次第

一ノ鳳輦彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊 爲之應神天皇也

二ノ鳳輦彦火々出見尊

三ノ鳳輦豐玉姬

四ノ玉輦宗形 湍津嶋姬 市杵嶋姬 合殿輿也

五ノ玉輦神武天皇同御兄弟之神 合殿輿也（二七丁才）

里俗汚穢之人禁入里中、里人有死穢作喪ノ屋于山野、
（マ）

移居之、穢之限充後還于里、俗謂之屋摩阿加利、
（マ）

里有彦婦、遽造產屋于野、移之產焉 產屋無豫作、

產ノ氣發時、遽作之、產婦亦走行此、之邑之風習也、產

屋末^レ成而産云云／此因^レ為^下祭^上祀蓋不合尊豐玉姬^上之宮^上也、
以上木坂山八幡本宮御鎮座傳、延喜式／所載對馬國上縣
郡和多都美神社 名神大 / 是也、(一七丁ウ)

清水山八幡新宮御鎮座傳

神功皇后征伐新羅、還幸之時、着御于下縣／郡與良郷與
良邑、安鳳輦于伊知^{イチ}ノ原、今云天道茂、／觀覽清水山
曰、神靈留座山也、遂行幸于此／山、安置御守鏡于岩
上、定神籬磐境、祭和魂／神日本武尊足仲彦天皇及和
多都美神、永^{ヒタル}／祈守天下、又祭豐玉姬于清水山之南
嶽、今称／宝滿嶽、天武天皇白鳳六年丁丑、依神記
勅造／營宮殿于清水山之麓、則奉彫應神天皇之(一八
丁才)神像、以二刀三拜奉彫云、又奉迎座于木坂
山神功皇／后之神像、以仲哀天皇神功皇后應神天皇／稱
新宮八幡三所、奉祭祀、又以稚奴毛^{ワカヌケタマヲ}二俣／皇子之裔八
多真人^{タフマト}補宮司、
和多都美神二座祭神 玉依姬豐姬
若宮祭神 仁德天皇
若殿 又称新靈 祭神 菟道皇子
右四神称脇宮四所、

今所祭祀于本殿之神像五座、(一八丁ウ)

仲哀天皇神功皇后應神天皇玉依姬豐姬

若宮一宇 祭神 仁德天皇

新靈一宇 祭神 菟道皇子

以上七神載延喜式神名帳對馬國下縣／郡和多都美神 名神

大 是也、

平神社^{ヒラノ} 祭神日本武尊

天照神社^{アマテラス} 祭神天穗日命

右二神載延喜式神名帳對馬國下縣郡／平神社是也、(一九

丁才)

末社

濱殿神社 祭神豐玉彥神、在^二于櫻川之北^一、此地古、海濱也、

八月十五日八幡三／所脇宮四所御幸于此社、執行放生會

、中^二於此社內設^二衡舎^一、今纔殘^二少森^一、

太田神社 祭神太田命、古在^二于本殿之前^一、向^レ東、号^二御

先驅神社^一、又一社祭祀于立龜嶽之麓、故称^二太田濱^一、

祭此神于二处、大社之例也、為^二導神^一、故參詣于八幡

宮之人、先／拜此神、而詣于本社、古礼也、此式今殘

傳于山城國賀茂神社云云、

瀧殿御子神社 祭神愛敬惠比須神、在于惠比須崎^ニ、

神位 和多都美神社平野神社共正四位下、ノ神籬磐境元曆元

年三月記云、東限^ノ路 謂伊知^ノ川（一九丁ウ）之向路^ニ、

南限^ノ櫻田^ニ 今云金石也、櫻田ハ櫻谷之誤乎、櫻谷ハ佐久奈

多利之轉語ノ也、謂被川^ニ、西限^ノ山 今云立山、北限^ノ

神山^ニ、廷^ニ里宅^ニ 神山謂風神々ノ社之地、今無^レ社、或

云、限^ノ白川^ニ、今云宮谷也、

一云伊知^ノ川、神明櫻川神明白川、神明^ハ者上ノ古不^レ入^ニ人

于磐境之内^ニ、於^ニ此川々^ニ、參詣人垢ノ離潔齋、自^ニ此川^ニ為

神拜^ニ云云、

宮殿 南向、神殿 五間三間、内有廣前^ニ、檜縁 前後

左右有^ニ欄干^ニ、廊ノ下 二間一間半、拜殿 三間半二

間半、別宮拜殿 三間半一間半、今号^ニ舞殿^{マデ}、廣間

三間半二間、大鳥居中鳥居隨身門御厩（二〇才）等有

之、古者常飾^ニ日象月象幢青龍朱雀白ノ虎玄武之幢纛万歳等

之幢^ニ、並御銚数本、又ノ以黃銅包^ニ屋之木口^ニ 黃銅重二十

六貫五百目、德治元年ノ之記云、有^ニ大風^ニ八幡宮千木樑木

吹落、並天ノ両以下之御銚数本顛倒咸損、乃納^ニ于社内^{チギカウラギ}ノ

平宮若宮若殿之三宮在^ニ于本殿之右^ニ、東向ノ 平宮古方二

間、今九尺社、有^ニ駒犬等^ニ、都同^ニ于本殿、近代輕卑也、若

宮若殿古一間半二間、同ノ天照宮、今方一間、

献^ニ白鷄於當社^ニ之来由（二〇丁ウ）

仲哀紀曰、詔群臣曰、朕未^レ逮^ニ弱冠^ニ而父王 日本ノ武尊

既崩、之乃神靈化^ニ白鳥^ニ上^レ天、仰望之情、一ノ日勿^レ息、

是以翼獲^ニ白鳥^ニ、養^ニ之於陵域之地、因ノ以視^ニ其鳥^ニ、欲^レ

慰^ニ願情^ニ、則令^ニ諸國^ニ俾^レ貢^ニ白鳥^ニ云ノ云、因^ニ茲奉^ニ白鳥於

平宮也、

神事祭禮

正月元日 四方拜、有典膳勸盃之禮、

同六日 若菜、有典膳勸盃之禮、

同七日 人日、有典膳勸盃之禮、（二二丁才）

正月十一日、國中之神職參拜、而祈^ニ天下泰平ノ國家安全^ニ

今謂之堂ノ口開、因^ニ茲有^ニ太守之代參^ニ神拜ノ而有^ニ献酌^ニ

、畢各退下 古太守開^ニ御印鑰之庫^ニ、出^ニ天印^ニ、而令^レ記^下

告^ニ國官ノ人旧年之勤功於太宰府^ニ之書^上、以^ニ天印^ニ押^ニ于其

書、送^ニ于太宰府^ニ、預^ニ除目^ニ、

ノ同十五日 餅粥、有典膳勸盃之禮、

同十七日、武射^{フシヤ}ノ祭 歩弓也、書生職^{シヤウシキヤウタイギヨウジ}悉大行事 勤^ニ行之^ニ、

書生職ハ今之書ノ役、大行事ハ諸役人之古号也、廻射杭爲射、鳴鉦鼓奏、

二月初午日、祈年祭、祈三年中之五穀安全、午日ハ祈五穀之日也、此謂ノ刀祢利ノ神事者、古奉事于當社之舍人有数多、領此祭田、因自舍人出此物料、故所名也、(二二丁ウ)今無舍人神人、子日始散齋有音樂典膳勸金奉幣之禮、

三月三日 桃花高宴、有典膳勸金之禮、

五月五日 御領會、有典膳勸金之禮、謂御領會者、神功皇ノ后詔群臣曰、爲不忘天下武備、五月五日造鰯予分人数于上下、以菖蒲草爲劍、試戰、令ノ習勝負也、因於上御領下御領執行之、故号御領會、

六月十五日、有典膳勸金奉幣之禮、畢有猿ノ樂、

七月七日 星合又稱七夕、有典膳勸金之禮、謂星合七夕者、素戔(二二丁才)鳥尊娶櫛稻田姫住居於出雲國大殿之日也、因茲祈男女之縁日也、

八月放生會大祭九日、初散祭、

同十二日、御酒開高宴、此日國中之神職男女來集、

同十三日、以首樂祭本殿與若宮、有典膳勸金奉幣

舞、謂之打鳴神事、因有舞樂之祭号平、一古記云、平住吉祭、

同十四日、奉飾鳳輦於廣前稱高座、奉鎮神鏡也、古昔有天下泰平國家安全之大被、今也無、此夜有舞樂神樂等、謂此試樂神事、

同夜平宮新靈宮有御祭、有音樂典膳勸(二二丁ウ)孟奉幣舞樂、

同十五日、放生會神事、此神事者、新羅征伐凱還之御吉例也、

着赤假面於榊枝、号太田神、着青假面於榊枝、号磯良、列行幸此兩神者導神也、謂此先陣御麻後陣御麻、行幸演殿、今無演殿、行幸惠比須崎假殿、奉乘一二之三之鳳輦於浮殿、於浮殿之御前並螺螄貝、而讀詔文、畢而以後手捨放于海邊、古此時有發聲、

今無、放生畢、陪從奏樂、有入御演殿、而又奏樂、以供奉之武器迴瑞籬三度、伶人立于左右、每御鰯予迴來、以日本舞爲三拜、為三拜於

(二二丁才)御鰯予三度、謂是日本舞之九拜、次立鰯矛於柵木、据御臺盤於神前、社家大公事在廳公事大行ノ事小行事、神人各立轉供、以送奉膳迎奉膳、奉御

納礼御酒典膳等^ニ 典膳勸盃之間、奏^レ樂、社家命婦司^ニ典膳勸^ノ盃、祝詞大夫申^ニ祝詞、大^{梯力}奉幣畢、而宮司社^ノ家命婦神孀神樂師社職數輩有^ニ神拜^ニ畢、而^ノ伶人振^下御^ミ鱒^ホ矛^コ不^レ傾^{カラム}本末^ニ左右左^ニ 見^レ振^ニ其矛^ニ武士^ハ考^ニ國^ノ之安危^ニ、農夫考^ニ耕作^ニ、獵漁考^ニ獵漁^ニ、舩夫考^ニ風波^ニ云云、次有^ニ種々舞樂^ニ畢、^ノ而下^ニ神饌^ニ賜^ニ賑於供奉之人々^ニ、各頂戴終、而^ニ三丁ウ^ニ 還御、

同夜有^ニ月之高宴^ニ、

九月九日 菊宴、有典膳勸盃之禮、

十一月初午日、神嘗日 以新穀祭也、祭義同^ニ二月初午神事、

又謂^ニ此志津之祭^ト、

十二月十三日 鬼宿日、年頭^ノ事始有、典膳勸盃^ノ之禮、

同晦日夜、宮司社家殿簾、

右之外右有告朔等之礼、又有每月朔幣^ニ二四才^ニ

朔膳、二八月社日之祭等、今絶、

鳳輦之次第

- 一ノ鳳輦 應神天皇
- 二ノ鳳輦 神功皇后
- 三ノ鳳輦 仲哀天皇

- 四ノ玉輦 二輿合殿 玉依姬 豐姫
- 五ノ玉輦 二輿合殿 仁德天皇 菟道皇子

以上八幡新宮御鎮座之傳^ニ二四丁ウ^ニ

和多都美神^ヲ奉^レ稱^ニ八幡^ニ之義

地神四代火折^{ホノリ}命與^ニ火酢芹^{ホノスセリ}命^ニ、競^フ焉、火折命^ノ至^ニ于汀^ニ、歎^{ナゲキ}焉、爰^ニ太田神現出、整^{ユカ}舩^ノ之海宮、火^ノ折命隨^{ヲシヘ}教^ニ至^ニ海宮^ニ、海宮主^ヲ見^テ異^ニ之、尊重^ニ以^ニ豐^ノ玉姬^ノ為^レ妃、留^ニ于海宮^ニ三歲焉、得^ニ六^ノ秘傳^ニ而還、^ノ與^ニ火酢芹^ヲ命^ニ戰^ニ于筑紫^ニ大勝、火酢芹命降^ニ為^ニ隼人^ニ、火折命平^ニ治筑紫^ニ、而稱^ニ彦火々出見尊^ニ 事詳^ニ于神代卷^ニ故畧^ニ于此^ニ、所謂六秘者、潮滿瓊汐涸瓊振^{シホミツニシホヒルニフル}浪^{ナミ}緒^{ヲヒレ}切^ニ浪緒振^{レフ}風緒切^レ風緒是也、且加^{マタ}瀛津^{ヲキツ}^ニ二五丁才^ニ 鏡邊津鏡^ヘ、此^ヲ號^{ナツ}玉津寶^ト 齋和訓比礼、又訓波多、與^レ幡同義、取^ニ魚^ノ之^ノ振^レ鱒前後左右、自由^ニ動搖^ニ之^ニ、彦火々出見尊傳^ニ此于皇子^ノ武位^ヲ起^ニ命^ニ、武位起命傳^ニ此于椎根津彦^ニ、神武^ノ天皇得^ニ此傳^ニ與^ニ椎根津彦^ニ同心、東^ノ方^ヲ與^ニ長髓彦^ニ戰^ニ、而得^ニ勝利^ニ、因號^メ稱^ニ神日本磐余彦^ニ、然後神^ノ功皇后^ノ於^ニ豐浦津^ニ、和多都美神化^{ケシ}号^ニ豐姫^ニ、授^ニ玉津寶^ヲ傳^ニ于神功皇后^ニ矣、今稱^ニ八幡^ニ之

神者ノ謂ニ瀛津嶋姫湍津嶋姫市杵嶋姫彦火々出ノ見尊豐玉姫
 彦波瀲武尊玉依姫神武天皇(二五丁ウ)仲哀天皇神功皇后應
 神天皇豐姫仁德天ノ皇之十三神也、以此神ニ為レ父為レ母為レ
 姉為レ妹ノ為レ夫為レ婦為レ子、故祭レ之、以ニ波瀲武尊與ニ應神
 ノ天皇ニ為ニ同神、以ニ火々出見尊與ニ仲哀天皇ニ為ニ同神、
 以ニ豐玉姫與ニ神功皇后ニ為ニ同神、以ニ玉依ノ姫與ニ豐姫ニ為ニ
 同神、以ニ神武天皇ニ與ニ仁德天皇ノ為ニ同神也、古者稱ニ
 豐^{ヒロハタ}鱸^{ヒロハタ}宮^{マハタ}廣^{マハタ}鱸^{マハタ}宮^{マハタ}真^{マハタ}鱸^{マハタ}宮^{マハタ}栳^{マハタ}宮^{マハタ}、今都^ス稱ニ八幡、故有ニ
 和多都美住吉若宮ノ宗形宝滿南護妙女平野寄^{ヨリヤシ}八幡八幡等之
 (二六丁才)稱號、八幡者因レ称^{ヤツヒ}八幡神也 中古改鱸字
 作幡、又改作幡、後ノ以字音唱之、祭ニ彦火々出見尊與ニ
 豐玉姫、謂ニ正八ノ幡 又謂大隅八幡、八幡本宮ハ祭ニ神功
 皇后荒魂^{アラミタマ}神之ノ社、八幡新宮祭ニ神功皇后^{ニギハヤヒタマ}和魂^{ニギハヤヒタマ}神之社
 也、又ノ以ニ應神天皇一神一稱ニ八幡者、和魂荒魂之神、ノ
 留^ハ座^ニ於^ニ神功皇后^ハ神胸^ハ孕^ニ應神天皇、征^ニ伐^ニ新^ニ羅、故
 惣^テ和魂荒魂之神靈^ニ以^ニ應神天皇一神ノ祭^ニ之也、又以^ニ天
 照大神與^ニ應神天皇ニ為^ニ二所ノ宗廟^ニ者、天照大神ヲ為^ニ聖道
 之初、至^ニ應神天皇(二六丁ウ)八政九業成矣、此故所^下
 以與^ニ地神五代波瀲ノ武尊ニ為^ニ同神、以^ニ神武天皇ニ為^ニ子稱